

3つの椅子を通してみる 柏崎が生きた時代とデザイン

私たちに身の回りにはたくさんの「人間が作ったもの」があふれています。コップやお皿、机に椅子、家や車、あるいはスマートフォンのアプリケーションや社会制度まで。それら私たちが毎日の生活で目にするものは全て「デザイン」されています。

今日、「デザイン」という言葉は、非常に幅広い意味で使われており、また、時代と社会にあわせてその内容を少しずつ変えていっています。デザイナーやデザインに関わる人たち100人に「デザインとは？」と聞いたら、100通りの答えが返ってくるでしょう。捉えがたい「デザイン」について考える手掛かりに、辞典を引いてみると、広い意味では「なしとげようとする事物や行為のための準備・計画の決定過程」であり、「美術の分野では、素材の組み合わせや構造、全体の決定行為」(『新潮世界美術辞典』)を指すと書いてあります。言い換えれば「何かのためにどうするかを決めること」、モノについてであれば「どんな素材を使ってどんな形にしたり、どんな仕組みにしたりするかを決めること」となるでしょう。

「生きることから——柏崎栄助とデザイン」展では、デザイナー・柏崎栄助の歩みを福岡県立美術館の所蔵する作品を中心に振り返りました。柏崎がそれぞれの時代や社会にあわせて様々な取り組みを行っていたことがうかがわれます。現在知られている柏崎のデザインした作品は、その出発点が生駒との出会いと紅房における経験であったためか、生活の中で使うモノのなかでも器などが多く、展示作品もそれらが中心でしたが、このコーナーでは同時代の、少し異なるもののデザインをご紹介します。椅子のデザインです。

椅子は「座る」という目的のための道具として何千年も前から存在し、素材の進歩と技術の発展が分かりやすく、またライフスタイルや建築空間と密接に結びついているため、デザインを知る上で最適とも言われます。このコーナーで紹介する3つの椅子はそれぞれが時代を代表する名デザインと知られているもので、柏崎栄助が生きた時代を考えるヒントになるものでもあります。

一つめは柏崎栄助が訪れた近代ウィーンの基礎を作った人物の一人であるオットー・ヴァーグナーの椅子《アームチェア247(郵便貯金局の椅子)》。ヴァーグナーは柏崎が学んだヨーゼフ・ホフマンの先生でもあります。二つめはモダンデザインの礎石となった総合造形学校バウハウスの3代目校長であるミース・ファン・デル・ローエの椅子《MRチェア S533RF(MR-20)》。三つめは柏崎栄助とほぼ同時代を生きた日本人デザイナー・柳宗理の椅子《バタフライ・スツール》。

3つの椅子を通じて、その時代のデザインと彼らが向き合ったものをご紹介します。